

長野県総合教育センター研究発表会

研究資料（分科会2）

「困難さのある児童生徒を支える学校体制づくり」を
サポートするために

3 演習（情報交換）

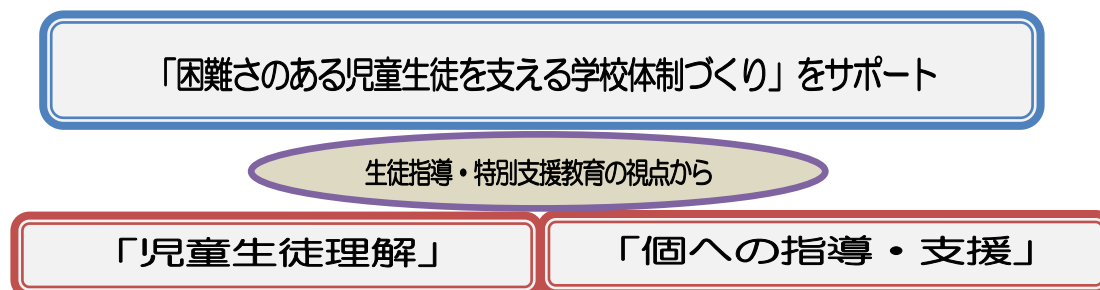
生徒指導・特別支援教育部

I 研究テーマ

「困難さのある児童生徒を支える学校体制づくり」をサポートするために
～生徒指導・特別支援教育の視点で開発したシートの提案～

II テーマ設定の理由

生徒指導や特別支援教育では、不登校や発達特性の偏りによる情緒的混乱などの重要な課題には早急に対応しなければならないが、直面する課題への対応にとどまらず児童生徒の自立と社会参加を促していきたい。その土台には「今日きてよかった」「明日またきたい」と思える「楽しい学校」の存在が不可欠となる。そして、「楽しい学校」を実現するためには、困難さのある児童生徒を支える教職員の共有・連携（※参照）が大切であると考え。そこで、現場の教職員の声を聞きながら、現場に即した教職員の共有・連携が図りやすくなるシートを開発・提案し、学校体制づくりの一助になればと考えている。



生徒指導・特別支援教育では、児童生徒の状態や特性、学習状況などを踏まえ、困難さの状態を把握する児童生徒理解と、児童生徒の個々のニーズに合った指導・支援をしていくことを大切にしている。この「児童生徒理解」と「個への指導・支援」の2つを視点として、困難さのある児童生徒を支える学校体制づくりをサポートする研究にしたいと考えた。

III 研究内容

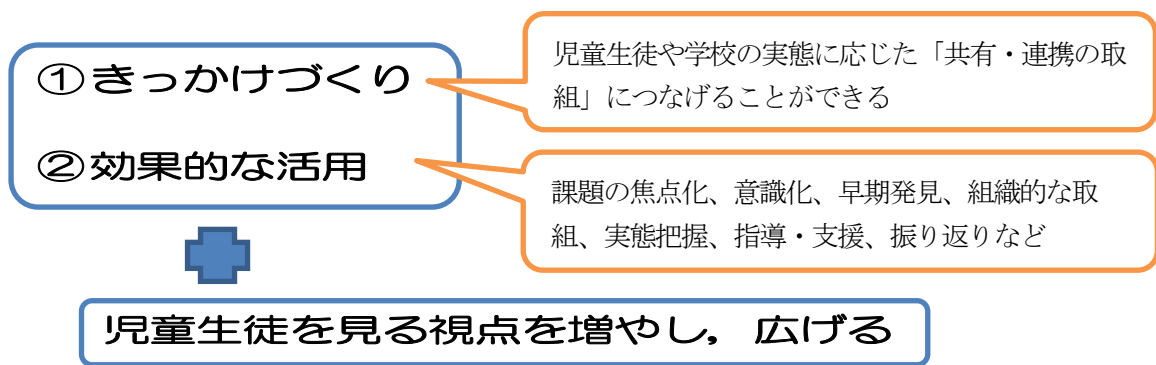
- 1 教職員の共有・連携が図りやすくなるシートの開発
- 2 連携協力校の先生方にシートを提案し、修正をしながら現場に即したシートに改良

文科省では各学校の体制整備の構築に努める必要があると述べている。教職員が児童生徒の実態や指導・支援などの情報とともに、お互いの思いや考えを共有したり、担任者間や複数の校内関係者が集まっての連携や、校内委員会など組織的な連携などをしたりすることを重要視している。その共有・連携を図るための方法として、個別の指導計画や個別の教育支援計画、児童生徒理解・教育支援シートなどを作成し、効果的に活用することを進めている。

本研究で提案するシートは、児童生徒や学校の実態に応じた「共有・連携の取組」につながる「きっかけづくり」や、「より効果的な活用」になることを期待している。

※共有・・・様々な情報（児童生徒の実態、願い、指導・支援の方向、教職員の思い・考え方、学校体制の課題など）を二人以上が共同でもつこと

※連携・・・互い（担任者間、複数の校内関係者など）に連絡をとり、協力して物事を行うこと



また、教職員の変容が児童生徒の変容にもつながっていくという考えをもって、私たち教職員が児童生徒を見る視点を増やし、広げることも大切である。

例えば、児童生徒が抱える様々な困難さに対して、「困った子」「問題のある子」ではなく、「困っている子」「問題を背負っている子」という捉えにしていけることが大切である。それは、何に困っているのか、どんな願いがあるのかと、まずは児童生徒の立場で考え、児童生徒理解をすることで、個々の児童生徒のニーズに合った指導・支援が見えてくると思われる。

このように、児童生徒を見る視点を増やし、広げるシートを開発・提案することにより、多くの困難さのある児童生徒への気付きや個々の児童生徒のニーズに合った指導・支援を行うことにつながる一助となることを願っている。

IV 研究の方向

1 特別支援教育の研究の方向

共生社会の形成に向けた施策が進められている。共生社会の形成に向けては、すべての児童生徒が共に学び合うインクルーシブな教育が重要である。そのインクルーシブな教育を構築するため、通常の学級において可能な限り「共に学ぶ」ことの具体として、授業のユニバーサルデザイン化などがある。それとともに特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室などの困難さのある児童生徒の教育的ニーズに応じた多様な学びの場の整備も推進されてきている。

また、多様な学びの場で指導を受けている児童生徒の実態に合った学びの場の柔軟な見直し、学びの連続性も重要視されている。

今年度6月に、特別支援学級の基礎講座の際にアンケート「特別支援学級と通常の学級との個別の指導計画作成の連携について」を特別支援学級の先生方に実施した。学校では連携などについて日頃から努力しているものの、児童生徒の、学校生活全般を捉えた一貫した指導・支援には結びつきにくいということが明らかになってきた。

そこで、発達障がいの可能性やその周辺領域にあると考えられる児童生徒の指導・支援を行う特別支援学級担任・LD等通級指導教室担当及び通常の学級の担任や教科担任をサポートするために、次の研究を行う。

特別支援学級やLD等通級指導教室を利用する児童生徒の理解と指導・支援を目指して
～特別支援学級やLD等通級指導教室のための「連携型個別の指導計画」の作成と活用～

社会性及びコミュニケーションや読み書きの未習熟は、自立や社会参加の障壁に直結するため早期対応が重要になる。児童生徒の状況を把握し、習得が不十分な場合、その個々の児童生徒のニ

ズに応じた継続的な指導・支援をスムーズにつなげていくことが大切である。そのために、特別支援学級と通常の学級及びLD等通級指導教室と在籍学級をつなぐ連携型個別の指導計画を提案する。これは、教師同士が共有・連携し、困難さのある児童生徒の学校生活全般を捉えながら、指導・支援の継続につながることを目指している。

2 生徒指導の研究の方向

平成27年度は県教育委員会心の支援課と県総合教育センター生徒指導・特別支援教育部との共同研究により「不登校の手引き」を作成した。平成28年度は、「手引き」をより実用性のあるものとして各学校で活用していただくことを願い、県内の各学校の不登校対策の取組を収集し、代表的な取組事例をセンター研究発表会で多くの先生方に紹介した。

- この2年間の研究の成果と課題として、以下のことが挙げられる。（◎成果 ○課題）
- ◎現場の教職員は、多様な「不登校への対応のあり方」を共有することができた。
 - ◎「不登校への対応の手引き」の活用への具現化につながった。
 - ◎「すでに不登校になっている児童生徒の自立支援」に係る取組から学ぶことが多かった。
 - 「不登校」や「不登校への対応」の捉えが、学校や教職員個人の間で異なっている。
 - 教職員一人一人のがんばりを校内全体の組織的な実践につなげていくことが重要である。
 - 一人一人の多様な課題に対応した、切れ目のない組織的な支援を推進する必要がある。

学校現場では、児童生徒が抱えている課題は多様であるため、対応の仕方も異なり、教職員間で共通理解が図りにくいのが現状である。

そこで、このような成果と課題を踏まえ、個々の教職員が取り組んでいる前向きな実践を学校内で共有・連携し、児童生徒が個々に抱えている多様な課題に対し、切れ目のない組織的な支援を計画的に推進するために、次の研究を行う。

児童生徒を支える教職員の共有・連携を目指して
～校内体制づくりのための「児童生徒理解や不登校への対応のあり方を考えるシート」の作成と活用～

生徒指導上の諸課題は、早期発見・早期対応が課題解決のためのポイントになる。また、それに係って児童生徒の実態把握や支援をする複数の教職員の確保や、一貫した支援を継続するための学校体制のあり方を考えていく必要がある。そこで、学校体制づくりのための「配慮を要する児童生徒の共通理解シート」や「不登校への対応のあり方を考えるシート」の活用方法を提案する。様々な生徒指導上の課題解決に向けた学校体制の構築を展開できることを目指している。

3 最後に

このシートは、学校のニーズに応じて活用したり、教職員や個々の児童生徒のニーズに応じて活用したりできるように考え作成した。さらに各校において、この4つのシートを様々な場面で柔軟に活用してもらうことで、教職員間の共有・連携のネットワークが生まれ、学校体制づくりにつながればと考えている。

*各学校で作成したシートは個人情報に掲載されているので、関係者が活用しやすい場所であり、かつ情報の流失がおきないように鍵のかかる場所に保管しましょう。

① 特別支援学級と通常の学級との連携シート

連携協力校との連携から

1 連携型 個別の指導計画の開発と提案

(1)「交流及び共同学習」

特別支援学級では個別の指導計画を作成し、その子に応じた指導・支援が行われる。そして、児童生徒の中には交流及び共同学習として、通常の学級の児童生徒と共に学ぶことがある。つまり、特別支援学級においては児童生徒の学びの場は固定されたものではなく、その学校の教育課程、その児童生徒の教育的ニーズに応じて決定していくということである。個々の児童生徒の実態に沿った交流及び共同学習を進めるために、特別支援学級と通常の学級との学びの場の選択については、下の図1のような段階が考えられる。

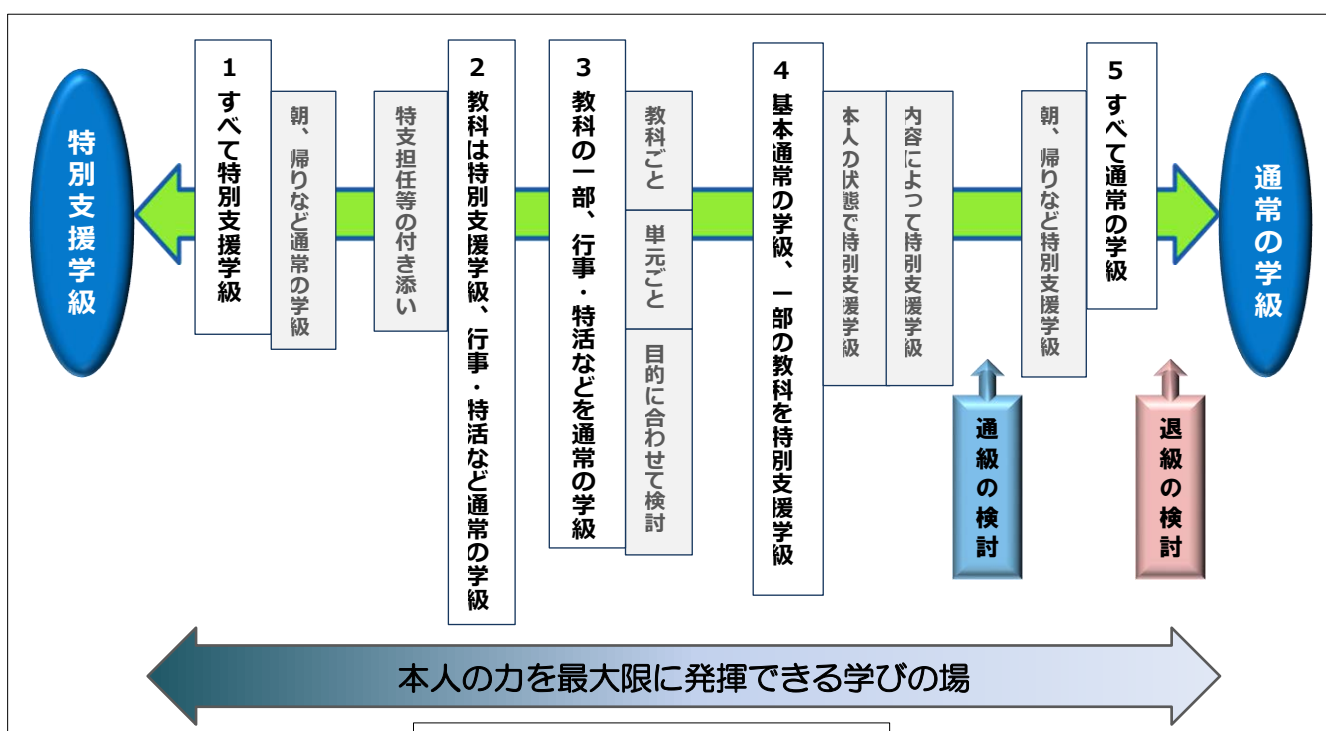
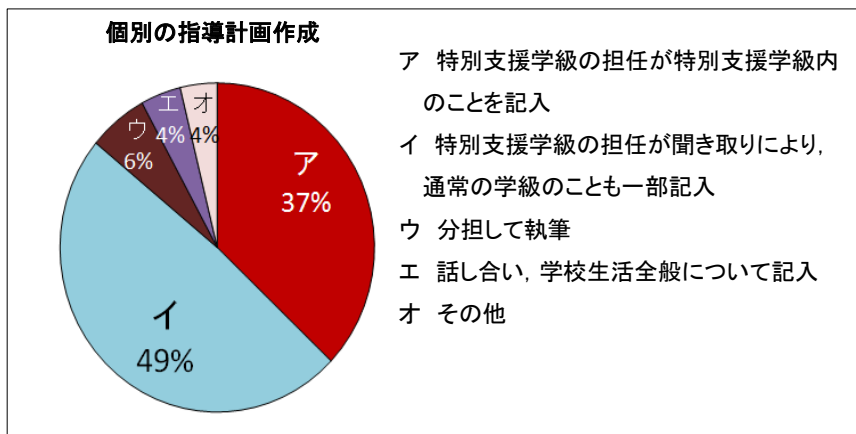
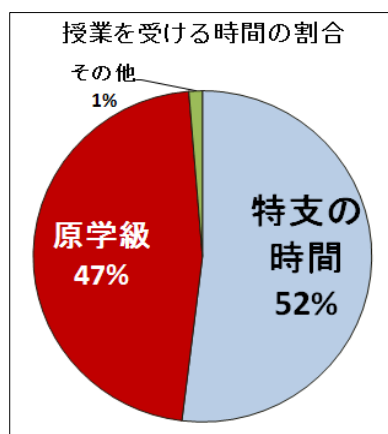


図1 交流及び共同学習の展開図(案)

(2)「実態調査」

児童生徒の交流及び共同学習は実際にはどの程度行われているのだろうか。そこで、特別支援学級の担任197名（県全体の約14.7%）に「特別支援学級に関するアンケート」を行った。

○特別支援学級に入級している小学校1年生から中学校3年生までの児童・生徒829名について調査。



- ・授業を受ける時間の割合は、一人一人について一週間のそれぞれの場所での時数を回答していただいた。すべての児童生徒ののべ時数から割合を算出した。
 - ・個別の指導計画作成は児童生徒一人一人についてどのように作成しているか回答していただいた。
 - ※ 授業を受ける場合は47%が原学級(所属の通常の学級)であり、交流及び共同学習が進められている。
 - ※ 個別の指導計画は特別支援学級内のことを特別支援学級の担任が記入しているのが37%である。特別支援学級の担任がほとんどを作成しているケースが約8割になる。
- 交流及び共同学習は進んでいるが、その割に個別の指導計画作成は特別支援学級の担任が単独で作成しているケースが多いことが実態として明らかになった。

(3)「困難さのある児童生徒への一貫した指導・支援の課題」

通常の学級と連携して個別の指導計画を作成するにあたって、課題になることや条件について特別支援学級の担任で、センター講座受講者から聞き取りを行った。

- ・通常の学級では特別支援学級の入級児童生徒を支えていく視点をもちにくい。
- ・特別支援学級の担任が単独で考えて支援するだけなら、文書にする必要性を感じない。通常の学級などと共に考え、実行していくなら意味があると思う。
- ・情報を共有することが難しく、どの程度通常の学級で学べるのか、どのような課題があるのか判断しにくい。

(4)「個別の指導計画で連携をつくる」

そこで、従来の個別の指導計画を教職員の「連携」が推進されるような形式に変更して提案したい。具体的には特別支援学級と通常の学級における支援を並べて書き、その子の支援が見通せる形にしている。この形式で個別の指導計画を作成することにより、より特別支援学級と通常の学級の担任及び教科担任との連携が深まり、よりその子に合ったきめ細やかな支援が提供されることを願っている。

2 連携型個別の指導計画を活用し、通常の学級と連携することができた事例

(1) 校内の交流及び共同学習が推進された取組

① 対象生の様子

- ・A生 中学1年生(男子) 自閉症・情緒障がい学級在籍

学習上の困難性はほとんど無い。特別支援学級の友達とは楽しく付き合うことができる一方、通常の学級では一人でぼつんとしていることが多い。他の人が活躍したり認められたりすると落ち込むことがある。みんなと仲良くしたいという気持ちをもっている。

- ・特別支援学級担任の丁寧な支援もあり、特別支援学級の中では仲良くまとまっている子どもたちの実態があった。
- ・授業はすべて特別支援学級において教科担任制で行われている。学活、給食、行事等は通常の学級で活動している。図1に示した段階では2の段階である。

② 連携型個別の指導計画を作成するために

- ・連携型個別の指導計画を特別支援学級の担任M先生に提案した。M先生は、その時点では通常の学級との連携について見通しがもてないようであった。そこで、文化祭、学活、給食など通常の学級で活動しているときの様子を分析してみるようお願いした。
- ・M先生がA生の通常の学級での過ごし方を意識して観察する中で、通常の学級の友との関わりに課題



写真：特別支援学級での授業

があるのではないかと感じ始めた。

- ・M先生は、A生の通常の学級での支援の必要性について通常の学級の担任K先生に相談してみると、支援の必要性や課題などの認識のずれがあることに気付いた。
- ・課題を明確にするために、保護者とも相談し、まずは通常の学級で1週間過ごしてみることにした。
- ・1週間通常の学級での姿を観察すると、授業には参加するが、自分から友と関わる姿は少なく、落ち着かない様子も時々みられた。A生は自分でも振り返りを行い、課題は「学級で友をつくること」だと考えた。



写真：通常の学級で先生の話のしっかりと聞くA生

③ 連携型個別の指導計画作成とその成果

- ・M先生は学年会に参加し、連携型個別の指導計画をK先生と共に作成した。友との関わりが課題だという点で一致したため、めあてとしてクラスでの友達づくりを考えていくことにした。
- ・作成する中で、任せられた仕事をきちんとこなすというA生のよさが確認された。そこで、小グループで自分の役割を果たす中で、友との触れ合いをさらに増やしていけるのではないかと支援を検討し、実践した。関わりが増えていく中で、A生は通常の学級のグループの中に入って作業をしたり、雑談の中に入ったりするなど、友との関わりに抵抗感が少なくなってきた。
- ・来年度は体育と音楽について交流及び共同学習を検討している。このことは図1に示した段階では3の段階への挑戦となる。

※ 特別支援学級で授業のほとんどが行われている学校では、連携型個別の指導計画は当初必要性が薄いように思われた。しかし、連携型個別の指導計画を協働作成することにより、通常の学級の友との関わりや集団の中での学びについて意識して考えたり、学びの場について検討したりすることにつながっていくことが分かった。

(2) その他、連携型個別の指導計画を配布した学校から寄せられた意見

- ・学びの場について細やかに考えることができた。
- ・日ごろから話し合いが行われ、通常の学級の担任と支援について共通理解ができ、互いに安心して交流及び共同学習ができた。
- ・特別支援学級と通常の学級のそれぞれの評価とこれからの目標について、統一して保護者に示すことができ、理解と協力を得ることができた。

3 シート活用によせて

連携型個別の指導計画を作成することを通して、以下のことについて学ぶことができた。

- ・教科や領域別だけでなく、学校生活の場面で考えると、学びの場や指導・支援の検討につながる。
- ・一人で考えて書くのではなく、シートをもとに話し合い、支援の方向を具体化し、共有することで、通常の学級との連携につなげることができる。

個別の指導計画は特別支援学級の担任が一人で考えて記入するのではなく、担任同士の話し合いや打ち合わせに活用すれば、よりその子のニーズに合った指導・支援につながっていくと考える。

参考文献 平成29年度学校基本調査（長野県教育委員会）

特別支援教育 教育課程指導手引書（長野県教育委員会）

特別支援学級と通常の学級との連携シート（試案）（連携型個別の指導計画表）

上段 原学級 下段 特別支援学級

(1) 各教科等の内容 ※ ○・・・原学級と特支が共通して行う支援

年 組 氏名		作成者：		(年 月～ 月)
	ねらい	支 援 方 法	評 価	
日常生活				
行 動				
対人関係 ・ コミュニケーション				
教 科 等	国 語			
	算 数			
	社 会			
	理 科			

	体 育			
	音 楽			
	図 工			
	総 合			
	道 徳 ・ 特 活			
	そ の 他			

(2) 育ちの姿 (両方の学級が相談して育った姿を書く)

--

(3) 必要とされる合理的配慮

必要とされる合理的配慮	配 慮 内 容	評 価 (今後の方向)

*教科等は必要な欄のみ選択して記入しましょう。(初めからすべて書き込もうとしないで、話し合いながら記入していく) 本人の様子、育ちをみながら、更新していきましょう。

特別支援学級と通常の学級との連携シート（試案）（連携型個別の指導計画表）【記入例】

上段 原学級 下段 特別支援学級

（１）各教科等の内容

※ ○…原学級と特支が共通して行う支援

3年組 氏名〇〇		作成者：△△（年 月～ 月）		
		ねらい	支援方法	評価（今後の方向）
日常生活 行動		○授業が終わったら、前の時間のものを片付けることができる。 ○2時間目の休み時間の終わりには教室にもどることができる。	○机の中の整理の仕方について写真に撮り、視覚的に示すようにする。 ○休み時間の初めには担任が声をかけ、終わりには友達に声をかけてもらうようにする。楽しく遊べたことや時間を守ったことを認め、意識できるようにする ・授業の終わりのあいさつの前に机の上の片づけを行うようにする。	○写真を見ながら整理することができました。気持ちが乗らないときは手伝うことができました。 ○トラブルがなければ、時間通り帰ってることができました。楽しく遊べることが増えました。トラブルへの対応が課題です。 ・挨拶の前に机を片付けると、すぐに遊びに行けてよいと本人がこの方法を選択するようになりました。
	対人関係 ・ コミュニケーション	○嫌な時やわからないときには、自分の気持ちを穏やかに周りの人に伝えることができる。	○落ち着かなくなってきたときは「落ち着けカード」を渡し、自覚できるようにする。 ・本人の言いたかったことを周囲の人が代弁しながら、適切な表現に近づけるようにする。 ・「困ったカード」を出したら援助をする。 ・昆虫や生き物への興味を生かし、発表の機会をとる。 ・ソーシャルスキルトレーニングを実施し、自分の気持ちの表現の仕方や、カードの使い方について練習する。	○落ち着けカードにオニヤンマの写真を貼り、初期のうちに渡すと落ち着けることが多かったです。 ・「困ったカード」はなかなか使おうとしませんでした。忘れ物をしたとき一度だけ使用しました。 ・SSTで行った内容を繰り返し示すとよいことがありました。「聞いてほしいことがあります」と自分で言えたことがありました。
教科等	国語	○小学校3年生の内容に準ずる。 ・自分の思いを表現できるようになる。	・発言の機会をできるだけ毎時間とるようにする。適切な言葉が浮かばないときには、援助し、表現する楽しさを大切にする。 ・作文、日記は「うれしい」「悲しい」などの語句カードを使って気持ちについても書けるようにする。	○「〇〇は友達がほしいんじゃないかな」という発言をし、友達が共感してくれたことで、以後率先して発言する姿がありました。 ・運動会の作文では1位になれなかったことを「くやしい」とカードから選び書くことができました。
		算数	○小学校3年生の内容に準ずる。 ○10分程度は計算問題に集中して取り組むことができる。	・計算問題は少ない量をまず提示し、終わったら残りの問題に取り組むようにする。 ・ひっ算は慣れるまで、色分けしてあるマス目の計算用プリントを用意し、原学級でも使えるように練習する。
	社会		○班の友達と一緒に調べたことをまとめ、発表することができる。	・仲の良い友達と同じ班になるように配慮する。 ・地図などは先に薄く下書きしたり、色を塗る範囲を囲んだりして安心して取り組めるようにする。 ・新しい単元に入るときに単元の内容についてあらかじめ資料を読んだり、地域のことについて話し合ったりして見通しがもてるようにしておく。
		理科	○昆虫や植物などの興味や知識を生かして、班や学級の友達に教えることができる。	・本人の知識や取り組みを他の児童に知らせるようにし、得意な点をクラスで生かせるようにする。 ・次の時間に行うことを予告し、楽しみにできるようにする。
	体育		○ルールを理解し、友達と一緒にゲームに参加できる。 ○必要に応じて友達にボールを渡すことができる	○チームの友達とルールの確認をするようにする。ゼッケンやタスキを活用し、チームが分かるようにする。思い通りにできず気分が優れなくなったときには少し休むようにするとともに、うまくいったときにしっかりと認めるようにする。 ・新しい単元に入るときには少し体験したり、ルールやコツを確認したりしておく。 ・キャッチボールなど、相手に合わせるとうまくいく運動を行う。

音 楽	○リコーダーの演奏を楽しむことができる。	○リコーダーの練習を教師と一緒にやる。穴をふさぎやすいようテープを貼るとともに、絵音符を使ってわかりやすくする。1曲できるとシールを貼り、達成感がもてるようにする。	
		・事前に曲を聞いたり、練習をしたりして、見通しがもてるようにしておく。指使いなどの調整を個別指導で行う。	
図 工	○様々な色を混ぜて楽しみながら絵を描くことができる ○絵の具の使い方がわかり、出したり片付けたりすることができる。	・全体の構想を考えると、友達のアイディアや工夫の発表の時間を設ける。構想や下書きまでを原学級で行う。手順表を渡し、全部塗ったらおしまいなど、見通しがもてるように支援する。	
		・絵の具を並べながら混色し、自分の塗りたい色を選ぶことができるようにする。 ・準備や片付けは、方法を示したカードを使って、できるだけ一人でできるようにする。	
総 合	○大好きな生き物への興味を生かして、調べ学習をする。同じ課題の友達と分担して調べることができる。	・写真や地図などを使ってまとめる方法を提示し、調べたことをまとめやすくするための援助をする。	
		・本人の話を聞いたり、集めた資料を見ながら一緒に整理したりし、発表する意欲がもてるようにする。	
道 徳 ・ 特 活	○小学校 3 年生の内容に準ずる。	・教材の話が把握できるように、挿絵や吹き出しを使ったり、実際に動作化したりする。 ・行事については予定をしっかりと伝えるときに、本人と一緒に目標を設定するようにする。	
		・行事については時間や絵、写真の入った予定表を渡し、見通しがもてるようにする。 ・落ち着けカードや困ったカードを使えるように確認を行う。	・行事の予定表により、予定を班の友達に教えることができ、落ち着いて楽しく参加できました。 ・困ったカードの使用は少ないですが、いざという時に使えることで落ち着いていました
そ の 他	○給食当番などの仕事をやり終えるまで取り組むことができる。	・当番としての仕事をカードにして渡し、自分で確認ができるようにする。よくできているときの姿を本人と確認する。	○給食当番はあまり好きではないようですが、カードを見ながら一通り取り組む姿がありました。
		・掃除は特別支援学級で行い、物差しを使って拭き進んでいくことで、仕事の進行具合が把握できるようにする。	

(2) 育ちの姿 (両方の学級が相談して育った姿を書く)

○特別支援学級での励ましや、予告、練習等により次第に自信をもって取り組めることが増えてきました。予定表が特に役立ち、今までやり通すことが難しかった当番の仕事などもやり通すことができました。原学級の友達に認められる経験により、穏やかに自己表現できることが多くなっています。今後も原学級、特別支援学級で相談しながら、〇〇さんのがんばりを支えていきたいです。

(3) 必要とされる合理的配慮

必要とされる合理的配慮	配 慮 内 容	評 価 (今後の方向)
○予定や手順などを示し、見通しをもつことができるようにする。	・授業の際には授業の流れを掲示する。作業などの手順は手順が分かるように箇条書きと絵や写真の入ったプリント等を用意する。	・手順や予定が書かれた紙はとて頼りにしており、そのためか給食当番や日直の仕事などにも取り組むことができました。
○自分の思いを適切に伝えることができる。	・本人と気の合う友達とともに活動できるように班分けなど配慮する。よいかかわりのできる友達の様子をクラスに伝え、ほかの友達も意識できるように促す。 ・「困ったカード」を使い、うまく伝えられないときは援助が求められるようにする。不安定になった時には「落ち着けカード」を渡し、自分でコントロールできるよう援助する。	・班の友達が、「A さんよくがまんしたね」など認めてくれたことをきっかけに友達との関わりが増え、原学級で穏やかに表現する姿が見られました。 ・落ち着けカードは不安定になる初期の頃に渡すと自分で自覚してコントロールすることがありました。

② LD 等通級指導教室と在籍学級との連携シート

連携協力校との連携から

1 連携型個別の指導計画の開発と提案

(1) 連携型個別の指導計画の必要性

通級指導教室は、対象児童生徒が抱える在籍学級での学習や生活における困難さを改善し、本来有する力を発揮できるように指導することで、在籍学級において充実した生活になる支援をしている。そのため、通級指導教室と在籍学級で一貫した指導が行えるようにするために、児童生徒の困難さを把握・共通理解をすることが大切になる。そこで、通級指導教室と在籍学級とが児童生徒の実態を共有し、指導に一貫性がもてるように連携型個別の指導計画を開発・提案した。

(2) 困難さのある児童生徒への一貫した指導・支援、評価の課題

(通級指導教室担当・在籍学級担任の話から)

- ・在籍学級で担任が対象児童に対する実態把握について悩んでいる場合が多い。
- ・独自の指導になってしまい、必要な力の積み重ねにつながりにくい。
- ・互いの教室で指導したことが身についていかない。
- ・支援会議や懇談会の際に共通認識で児童の目標や育ちについて話ができない。在籍学級の担任が根拠を示しながら児童の育ちの姿を説明することが難しく、保護者が理解できないことがある。特に急に説明を求められたときに困惑する。

(3) より連携しやすいシートに

連携型個別の指導計画を作成するにあたって、以下の点について提案された。

(通級指導教室から)

- ・通級指導教室の内容と在籍学級の内容が1枚のシートに記載されていると見やすく使いやすい。
- ・児童生徒の実態や目標、指導内容、支援が端的に述べられており、読めばすぐに使える。
- ・指導すべき児童が抱えている主訴が焦点化されており、実態から評価までがつながる形式がよい。

(在籍学級から)

- ・目標や支援については、通級指導教室の担当に相談をしながら方向を示せるようにしたい。
- ・合理的配慮を記載して、保護者とも合意形成が図れるようにしたい。
- ・保護者に、具体的な支援と合わせて育ちを丁寧に説明できるとよい。

(4) シート活用後の改良点

- ・実態の中には医療との連携（診断名・服薬等）を記載していきたい。
- ・合理的配慮や目標を考える際には、本人・保護者の願いが大切になるので、記載していきたい。
※ 自己理解を深めたり、合理的配慮を自ら申し出たりすることにつながる。
- ・次年度に向けた引継ぎ事項を記載しておくことで、指導者に変更が生じて一貫した指導ができる。

(5) 連携型個別の指導計画の作成についてのポイント

- ・実態の欄に主訴を1～2つに絞って記載する。
- ・目標は、在籍学級で目指したい姿を在籍学級の担任と通級の担当が具体的な言葉で考える。
- ・評価は、児童が「できた」「できない」といった姿だけではなく、指導による児童の変容や教師が講じた「支援の有効性」が見えてくるように記入する。在籍学級での育ちの姿を記載する。

- ・通級の担当と在籍学級の担任がお互いに授業での児童の様子を見合って実態把握し、一緒に作成や修正をしていく。

2 連携型個別の指導計画で共有した支援の方向を活用した授業の紹介

(1) 連携型個別の指導計画から（抜粋）

【主訴】一方的に話をして教師や友の話を聞こうとしない。話すことを止められるとパニックになる。
視覚的な情報や枠組みが設定されていることは得意。生活・対人関係につなげられる。

【目標】授業や活動の中で友や教師の話を聞くことができる。聞くことのよさを知ってほしい。

【本人の願い】友と一緒に授業や活動を楽しみたい。自分の話を聞いてほしい。

【支援の方向】

- ・見通しがもてるように、今日の学習の流れや約束、めあてなどが見える場所（黒板）に提示する。
- ・自ら取り組めるように、学習の流れやクラスの約束などではできるだけ一定にする。
- ・スキルが身につくように、通級指導教室で成功体験のある、聞くことのよさを感じるためのSST（ソーシャルスキルトレーニング）の活動を在籍学級でも行う。

(2) 連携型個別の指導計画を活用した授業の紹介（事例）

特別活動（学級活動 5 学年）

題材名：「色えんぴつを忘れちゃった」 ～聞くことのよさを感じよう～

※ グループの中で一人ずつヒントカードを読み、指示のあった絵に友と相談しながら色を塗って課題の絵を完成させる活動（SST）。

① 特別活動の授業では・・・

○具体的な支援「見通しの支援（枠組みを作る）」

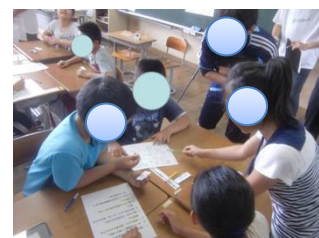
- ・あらかじめ黒板にめあてを貼っておき、確認できるようにする。
- ・約束がすぐ確認できるように、黒板に貼りながら読む。
- ・時間内に課題が完成するように活動時間や内容を調整する。

② 本児の姿から

- ・ヒントカードを読む。読み終わったら友の話を聞くという枠組みの中で安心して話をしたり聞いたりすることができた。
- ・最後まで聞くことで絵が完成していくので、聞くことのよさや大切さを実感できた。
- ・友から「〇〇さん耳がいいね」と褒められたことで、聞くことが得意なことを認識した。

③ 授業を通して連携型個別の指導計画の見直し

- ・実態には、話すことだけでなく、聴覚認知面が高いことも記載し、共通理解を図る。
- ・具体的な手だてとしては、聞く時間と話す時間を明確にする。発言は5回までとするなど枠組みを設けることで、安心して話をしたり聞いたりできそうである。



振り返りの場面で、本時は
「色の名前が聞き取れた」と発言し、カードに「色が聞き取れた」と記入した。めあての欄は、
【よくできた】に○をつけた。

3 シート活用によせて

この連携型個別の指導計画は、通級指導教室と在籍学級の先生方同士が実態把握から児童生徒理解、そして指導・支援を考え、実践し、見返していくという一連の流れに沿って無理なく作成・活用できるシートになっている。個別の指導計画のシートを軸として、共有・連携が充実したものになり、将来的に、他の教職員、保護者、地域と広がって、障がいのある子もない子も共に学ぶインクルーシブな教育につながってほしいと願っている。

LD等通級指導教室と在籍学級との連携シート

連携型個別の指導計画(試案)

対象児童・生徒

年 名前

通級指導教室

学校(担当:)/原籍校

学校(担任:)

実態（検査結果，医療との連携，生活上・学習上の状況等《主訴》）

目標（前期・後期） ※通級と在籍学級が共通	本人の願い・保護者の願い

通級指導教室における指導目標	在籍学級における指導目標

通級指導教室における指導内容	在籍学級における指導内容

通級指導教室における具体的な支援と配慮点	在籍学級における具体的な支援と配慮点

在籍学級で必要とされる合理的配慮	本人，保護者の意見	※ 合意形成を図る

評価（育ちの姿）

通級指導教室の今後の方向・来年度への引継ぎ	在籍学級の今後の方向・来年度の引継ぎ

LD等通級指導教室と在籍学級との連携シート

連携型個別の指導計画(試案) 【記入例】

対象児童・生徒

年 名前

通級指導教室

学校(担当:

) / 原籍校

学校(担任:

)

実態 (検査結果, 医療との連携, 《主訴》生活上・学習上の状況等)

WISC-IV (H30.2.16) VCI PRI WMI PSI

- ・言葉の数は多いが, 抽象的なことを理解したり, 推理したりするのが苦手である。見通しがもちにくい。
- ・友と遊ぶときやゲームをするときには, 自分のルールで遊ぼうとするのでトラブルになりやすい。

目標 (前期・ <u>後</u> 期) ※通級と在籍学級が共通	本人の願い・保護者の願い
・ゲーム (体育や SST) では, みんなの話を聞いたり, ルールを守ったりして最後まで活動する。	・イライラしないで友と楽しく遊びたい。体育の時はみんなと協力して最後までやりたい。(本人) ・みんなと仲良く一日を過ごしてほしい。(保護者)

通級指導教室における指導目標	在籍学級における指導目標
・教師や友が話しているときは静かに待てる。 ・ルールや活動に見通しをもって活動する。	・教師や友が話しているときは静かに待てる。 ・ルールや活動に見通しをもって活動する。

通級指導教室における指導内容	在籍学級における指導内容
・社会性を高めるグループ SST を実施する。 ・グループ SST の中で毎時間, 「話すのは一人だけ」というルールを守れるようにする。	・話したいときには手を挙げて発言をする。 ・みんなで決めたルールを守って活動する。

通級指導教室における具体的な支援と配慮点	在籍学級における具体的な支援と配慮点
・「話すのは一人だけ」と書いた紙を黒板に提示し, 授業の初めに確認する。 ・活動のルールや活動内容を職員が演示をしてみせる。演示の中で本人が気づいたルールや活動のやり方について発表する機会を設け, 発表内容を黒板に提示をして確認する。	・通級で使っている「話すのは一人」, 「話したいときは手を挙げる」と書いた紙 (絵) を授業の始めに確認する。手を挙げたら発言する機会を設ける。 ・ルールの書いた紙を提示する。活動の内容は演示をしたり, 映像を見せたりして確認する。

在籍学級で必要とされる合理的配慮 本人, 保護者の意見 ※ 合意形成を図る
・ルールややることは, 視覚的に分かるように提示をする。 ・クラスのルールや活動内容は, 個別に確認したり, 質問の時間を設定したりする。

評価 (育ちの姿)
・通級教室で, 通級担当と一緒に通級用とクラス用の「話すのは一人だけ」「話したいときは手を挙げる」と書いた紙を作成しました。通級のグループ SST の授業で練習したことにより, クラスでも話したいときにスッと手を挙げて発言する姿が増えています。 ・体育の授業の最初に教師が演示, 見本を示すことで, やることをしっかり理解して活動に取り組みました。友と最後まで活動でき, 終わった後は「楽しかった」とにこにこしました。

通級指導教室の今後の方向・来年度への引継ぎ	在籍学級の今後の方向・来年度の引継ぎ
・グループ SST を継続する。 ・見通しがもてるように手順表の作成の仕方と困ったときに「教えてほしいこと」の伝え方の練習をする。	・今までの支援の継続に加えて, 通級で作成した自分専用の手順表を活用する。 ・「お助けカード」を作成し, 本人が提示した時にはすぐに寄り添った声掛けと支援をする。

③ 配慮を要する児童生徒の共通理解シート

連携協力校との連携から

1 配慮を要する児童生徒の共通理解シートの作成と提案

(1) 理解と支援を進めるための共通理解シートの必要性

生徒指導提要では、生徒指導を進める上で、その基盤となる児童生徒一人一人の児童生徒理解の深化を図り、児童生徒を多面的、総合的に理解していくことが重要であることが述べられている。また、全教職員の共通理解、学校としての協力・支援体制を築くことが、欠くことのできない大切なものであるとも示されている。しかし、研修講座の振り返り、校内研修支援のアンケートや教育相談等の記録を振り返ると、「児童生徒理解とチーム支援」を課題としている先生方が多いと感じる。

児童生徒理解では、児童生徒が発する小さなSOSに「いつもとちょっと違う」という教職員の気付きと、友との関係や学習でのつまずき、体調や情緒の不安定さ、行動面の変化などに目を向け、一人一人がもつ背景（特性や家庭環境、個を取り巻く人的環境など）を把握することが求められる。そのために、教職員全員で多面的、総合的に児童生徒をみる必要がある。そこで、児童生徒の日頃の様子と特性を照らし合わせた実態把握と、担任や担当者が抱える課題や、これまでの指導・支援を見返しながら、当面必要と思われる指導・支援策を検討し合うことができる共通理解シートを作成、提案した。

(2) 配慮を要する生徒理解について、教職員間の共有における課題

- ・生徒に関する気付き、情報についてどのように共有したらよいのか、わからない。
- ・教職員がそれぞれの立場や視点で意見を言うため、生徒理解が深めにくい。
- ・生徒の現状や課題にのみ目が行き、強みを生かした指導・支援策をみんなで考え、共有することができにくい。
- ・指導・支援が担任と担当者任せになり、担任や担当者の抱える課題を共有することができにくい。

(3) 生徒に寄り添った理解と支援を共有するために

共通理解シートを作成するにあたって、連携協力校から以下の点について提案された。

- ・「不登校状況調査」など現行の様々な報告と重なる項目は入れず、記入の負担を少なくする。
- ・シートを読んで、書く内容がイメージでき、支援会議の進行に活用できる。
- ・指導・支援を行っている担任や担当者が抱える課題がだせる。
- ・チェックシートは、県内どの学校でも共有でき、客観的に個の特性が理解できるので、長野県教育委員会からだされたものを使いたい。
- ・チェックシートによる共通した項目について、それぞれが観察したことを共有する。

(4) 共通理解シートの作成についてのポイント

- ・実際に、指導・支援する担任や担当者がシートを使って記入しながら相談できるようにした。
- ・現状の要因として考えられることや、本人や保護者の訴えをチェックできるようにした。
- ・実態把握のためにチェックシート（長野県教育委員会）を活用して、気付いたことや今まで配慮してきたことを記入するようにした。
- ・支援会議等の進め方の資料として使えるようにした。

2 配慮を要する児童生徒の共通理解シートを活用して

(1) 活用後の共通理解シートの改良 ～活用した先生方からの意見を参考にして～

- ・一番心配なことを書く欄を設けた
⇒児童生徒の現状について要因として考えられることをチェックした項目の中から、担任や担当者が必要な指導・支援について焦点化して考えることができる。
- ・チェックシートや観察による気付きから配慮，指導・支援が必要な場合は◎，強みとなるものには○をつけた。
⇒現状や課題のみにとらわれず，児童生徒の今まで知らなかった面を理解しやすくなる。また，実態把握や児童生徒理解を深め，どこに配慮や指導・支援が必要かを共有しやすくなる。
- ・優先順位をつける欄を設けた
⇒学年会，支援会議で焦点化した話合いができ，共有・連携がしやすくなる。

(2) シートを活用しての先生方の感想

- ・チェックシートを使って，この子のことをいろいろ思い浮かべていると，様々な場面で生徒が発してきたSOSに気付かされ，胸がいっぱいになった。
- ・「できることからみんなでやろう」と言ってくれた先生方に，生徒だけでなく自分も救われた気持ちになった。
- ・この共通理解シートを使って，生徒の目の前の現状だけに目が行きがちになっていることを感じた。生徒の特性に配慮して，生徒が安心して授業が受けられるよう，さりげない個別指導を本人と相談して取り入れたいと思った。
- ・今までの支援・指導を振り返って，生徒への理解を深めたことで，生徒や保護者の思いに寄り添いきれていなかった自分に気付けた。
- ・正直，指導・支援に行き詰まりを感じていたが，一番，心配なことに絞って，今，できる配慮や指導・支援を出し合い，優先順位をつけたので，今までよりも焦点的，具体的に考えることができた。



3 シート活用によせて

連携協力校の先生の言葉に「生徒の課題ばかりに目が向き，必要な配慮や指導・支援策を考えることができていなかった自分に気付いた」「生徒の強みを生かした指導・支援を考えるなんて思いもしなかった」がある。

これは，生徒の実態を多面的，総合的に把握し，今までの指導・支援を見返すことで，生徒の課題となる部分だけでなく，強みに目を向けた指導・支援の大切さに気付いた言葉である。シートを活用した先生方からの感想や意見を考察したところ，

- ・先生方が児童生徒のとらえや見方を広げ，思いを深める
- ・児童生徒とその子に関わる先生の困りに気付き，共有する
- ・今，一番心配なことに焦点を絞って必要な配慮や指導・支援を考え，連携して取組むチーム支援につなげることができる

ということがわかった。今後もこのシートをそれぞれの事例に応じて，活用方法や項目を工夫しながら活用し，児童生徒のための指導・支援に生かしていただけたらと思っている。



配慮を要する児童生徒の共通理解シート(試案)～理解し支援するために～

※この共通理解シートは、配慮を要する児童生徒の理解を深め、必要な配慮や指導・支援を考えるために使います。学級担任だけでなく関わっている児童生徒について、どなたが記入してもよく、支援会議などの進行にも、記録にも使えます。全部、記入できなくてもいいです。

1 認識のずれと一番心配なことを記入します。その後、2 チェックシートを使った児童生徒の特性を確認し、今まで配慮や指導・支援してきたことを見返します。そこから、学年会や支援会議などで、より具体的な方策や役割分担を考え、当面の指導・支援を決め出していく共通理解シートです。

記入日:平成 年 月 日 , 記入者		子どもとの関係			
学校名		高 校 生	課 程	学 科	
ふりがな		学 級, 番	年 組 番	性 別	男 ・ 女
児童生徒氏名		生年月日	平成 年 月 日	生まれ () 歳	
現 住 所		連 絡 先	自宅: 携帯:		

1 あなたが、この子の現状について要因と考えていることはどのようなことですか。下記の内容から、あてはまる項目のチェック欄に○を書きましょう。(訴え…本人や保護者からの訴えのこと)

区 分		チェック欄	
		とらえ	訴え
学校に係る状況	いじめ、(いじめが疑われる友達関係、気になる言動を含む)		
	不登校(学級に入れない、集団での活動への拒否感を示す等も含む)		
	友達関係(いじめを除く、周りの視線が気になる、孤立感がある等も含む)		
	教職員との関係をめぐる問題(不信感、不満などを抱えている等も含む)		
	保護者対応(支援や配慮内容への不信感、不満が払拭できないも含む)		
	学習に関する問題		
	進路に関する問題		
	クラブ活動や部活動等への不適応(顧問や部員との関係、練習等も含む)		
	学校のきまり等をめぐる問題		
家庭に係る状況	入学、転編入学、進級時の不適応		
	家庭の生活環境の急激な変化(家庭内での関係性の変化も含む)		
	親子関係をめぐる問題(養育が困難な状態、親子関係の不和等も含む)		
	家庭内不和(本人ではなく家族間の関係をめぐる問題等も含む)		
	貧困の問題(家庭環境の問題を含まない)		
本人に係る状況	児童生徒虐待(保護者だけでなく兄弟姉妹からの暴力等も含む)		
	心身の健康に関する問題(医療機関への受診、病気等の長欠を含む)		
	非行・不良行為(深夜徘徊、飲酒・喫煙、補導等を含むが、暴力は除く)		
	無気力		
	不安、イライラなどの情緒的混乱		
	ネットやゲームへの依存		
不 明 そ の 他	発達に関する問題(発達障がい、知的障がい等を含む)		



※チェックした項目の中から一番、心配なことは何ですか。

- 2 チェックシートや行動観察などで気づいたこと、今まで配慮してきたことを書いてみましょう。
気づいたことから配慮や指導・支援が必要な点は、文末に◎、強みとなる点は○をつけましょう。

	チェックシート、行動観察などで気づいたこと	今まで配慮してきたこと
＜学習面＞ チェックシート 1～6		
＜行動面＞ チェックシート 7～9, 13～14		
＜コミュニケーション面＞ チェックシート 10～11		
＜対人関係面＞ チェックシート 12		
＜その他＞ (家庭環境など)		
各種検査結果		



- 3 児童生徒の配慮や指導・支援するにあたり、あなたと本人の願いを書きましょう。

あなたの願い	
本人の願い	



- 4 この子に必要なと思われる配慮や指導・支援はどのようなことですか。その配慮や指導・支援を行う上での課題だと考えられたことはどのようなことですか。取組みの優先順位をつけましょう。

必要と思われる配慮や指導・支援	必要と思われる配慮や指導・支援を行う上での課題と考えたこと	優先順位
	➡	
	➡	
	➡	
	➡	
	➡	



- 5 当面行う指導・支援として考えられることは、どのようなことですか。

--

配慮を要する児童生徒の共通理解シート(試案)～理解し支援するために～【記入例】

※この共通理解シートは、配慮を要する児童生徒の理解を深め、必要な配慮や指導・支援を考えるために使います。学級担任だけでなく関わっている児童生徒について、どなたが記入してもよく、支援会議などの進行にも、記録にも使えます。全部、記入できなくてもいいです。

1 認識のずれと一番心配なことを記入します。その後、2 チェックシートを使った児童生徒の特性を確認し、今まで配慮や指導・支援してきたことを見返します。そこから、学年会や支援会議などで、より具体的な方策や役割分担を考え、当面の指導・支援を決め出していく共通理解シートです。

記入日:平成 年 月 日 , 記入者		子どもとの関係	
学校名	信州中学校	高 校 生	課 程
ふりがな	ながの えーこ	学 級, 番	1年 2組 3番
児童生徒氏名	長野 A子	生年月日	平成 年 月 日 生まれ ()歳
現 住 所		連 絡 先	自宅: 携帯:

1 あなたが、この子の現状について要因と考えていることはどのようなことですか。下記の内容から、あてはまる項目のチェック欄に○を書きましょう。(訴え…本人や保護者からの訴えのこと)

区 分		チェック欄	
		とらえ	訴え
学校に係る状況	いじめ、(いじめが疑われる友達関係、気になる言動を含む)		
	不登校(学級に入れない、集団での活動への拒否感を示す等も含む)	○	○
	友達関係(いじめを除く、周りの視線が気になる、孤立感がある等も含む)	○	○
	教職員との関係をめぐる問題(不信感、不満などを抱えている等も含む)		○
	保護者対応(支援や配慮内容への不信感、不満が払拭できないも含む)	○	
	学習に関する問題		
	進路に関する問題		
	クラブ活動や部活動等への不適応(顧問や部員との関係、練習等も含む)	○	
	学校のきまり等をめぐる問題		
家庭に係る状況	入学、転編入学、進級時の不適応		
	家庭の生活環境の急激な変化(家庭内での関係性の変化も含む)		
	親子関係をめぐる問題(養育が困難な状態、親子関係の不和等も含む)		
	家庭内不和(本人ではなく家族間の関係をめぐる問題等も含む)		
	貧困の問題(家庭環境の問題を含まない)		
本人に係る状況	児童生徒虐待(保護者だけでなく兄弟姉妹からの暴力等も含む)		
	心身の健康に関する問題(医療機関への受診、病気等の長欠を含む)		
	非行・不良行為(深夜徘徊、飲酒・喫煙、補導等を含むが、暴力は除く)		
	無気力		
	不安、イライラなどの情緒的混乱	○	○
	ネットやゲームへの依存		
不 明	発達に関する問題(発達障がい、知的障がい等を含む)		
そ の 他			



※チェックした項目の中から一番、心配なことは何ですか。

友達関係

2 チェックシートや行動観察などで気づいたこと、今まで配慮してきたことを書いてみましょう。
気づいたことから配慮や指導・支援が必要な点は、文末に◎、強みとなる点は○をつけましょう。

	チェックシート、行動観察などで気づいたこと	今まで配慮してきたこと
＜学習面＞ チェックシート 1～6	・学習面では、特に大きな心配はない○ ・学習意欲は薄れているが、家で学校からの課題はやっている ○, ◎	・授業の板書を写真に撮り、説明文を加え、授業内容や進度を伝える ・欠席した日は学習プリントを渡す
＜行動面＞ チェックシート 7～9, 13～14	・場の理解、こだわりについては、大きな偏りを感じられない○ ・不安感が強く、周囲に配慮し過ぎる◎	・相手を気遣える面を認める ・不安に思うことを表現できるよう話しかけ、関われる職員を増やす
＜コミュニケーション面＞ チェックシート 10～11	・自己中心的な言動はなく、相手の心情も考えながらやりとりできる○ ・笑顔や冗談を言う場面が減り、人と関わるときに堅さが見られる◎	・気になった友との場面を図式化して、自分とコミュニケーションのとり方が違うことに気づけるようにする ・気持ちに寄り添い、安心感を与える
＜対人関係面＞ チェックシート 12	・真面目でこだわりが強く、ルールや秩序を重んじる傾向の友とは合わず、誤解されやすいため、攻撃されやすい◎ ・相手の言葉を真に受けやすく、傷つき、過剰な反応をするときがある◎ ・優しく素直で親しい友が多い○	・SC、養護教諭が本人の話をよく聞き、気持ちを和らげる ・本人の気持ちに共感しつつ、相手の思いや考えを考えられるよう、気になる場面を図式化して振り返る ・親しい友との関係が切れないように関われる場を大切にする
＜その他＞ (家庭環境など)	・両親ともに学校に対する理解があり、協力的だが、担任の対応に不満◎	・保護者の思いや考えをよく聞く ・担任との認識のずれを修復する

3 児童生徒の配慮や指導・支援するにあたり、あなたと本人の願いを書きましょう。

あなたの願い	自分の自信を取り戻し、学級集団の中で生活できるようになってほしい
本人の願い	安心していられるクラスになって、クラスに戻りたい

4 この子に必要なと思われる配慮や指導・支援はどのようなことですか。その配慮や指導・支援を行う上での課題だと考えられたことはどのようなことですか。取組みの優先順位をつけましょう。

必要と思われる配慮や指導・支援	必要と思われる配慮や指導・支援を行う上での課題と考えたこと	優先順位
・本人が、学校の中で安心していられる場所を確保する	・校内中間教室の利用を早急に検討（関わる職員が限定され、負担増）	1
・SCや養護教諭との相談を継続し、本人の情緒安定を図る（担任との関係修復の糸口を探る）	・本人の情緒の不安定さに、担任への強い不信感を保護者がもっている	1
・相手のとらえ、思いや考えが本人と違うことを気になる場面を図式化して振り返る	・本人が、自責の念にとらわれないような言葉がけ	2
・学級・学年で「人間関係づくり、」や「人権感覚を高める」学習を行い、人の考え方、表現の仕方の違い、認め合いについて考える	・本人が、周りの生徒の反応を怖がり、学習を行うことを拒否している。本人の学習への不安をどう払拭するか	3

5 当面行う指導・支援として考えられることは、どのようなことですか。

・本人と保護者の思いに共感し、相談しながら、学校の中で安心していられる場所を確保する ・担任が本人と関われるように、周りの先生方で本人や保護者の担任への不信感を減らす ・担任と本人がさりげなく無理なく関われる場を設け、担任とは前もって声がけなどを打合せる

④ 不登校への支援について考えるシート

連携協力校との連携から

1 シートの開発と提案にあたって

- (1) 生徒指導・特別支援教育部で行ったチーム課題研究（平成 28 年度まではプロジェクト研究）
平成 27 年度 『不登校への対応の手引き』の作成 → [研究後の課題] 実践事例の紹介の充実
平成 28 年度 実践事例集の作成 → [研究後の課題] 組織として考え合える工夫
平成 29 年度 生徒指導・特別支援教育の視点で開発したシートの提案
本年度は、手引きや実践事例集を活用し、校内の教職員間で考え合える方法を研究してきた。

(2) 教職員間の共有・連携や予防的・開発的な生徒指導の推進が求められる時代

不登校やいじめなど生徒指導上の課題は非常に重要である、と多くの教職員は個人レベルでは認識しながらも、その捉えには大きな差異がある。何か工夫しないと学校全体で課題を共有することは難しい。全教職員での課題共有ができぬまま「問題」が多発すると、対症療法的な指導に追われる結果となり、ますます対応や支援は難しくなり、課題は複雑になっていく。

こうした状況を打開するため、予防的・開発的な生徒指導の推進が叫ばれている。教職員一人一人が自らの先入観や態度を問い、日頃の実践を省察し合える組織の構築が、学校に求められている。

2 第 1 版の開発と提案

第 1 版のポイント

- ・不登校を「継続」「新規」に分類して考察し、自校の現状を教職員間で共有できるようにした。
- ・自校の現状に沿って、手引きや実践事例集を参考に検討できるようにした。
- ・参加者が自身の意見をまとめながら協議できるように、記入欄を多めに設けた。

(1) 【事例 1】校内研修における第 1 版の活用

ある小・中学校の教職員合同研修会で、「不登校への支援」について先生方と考える機会を得た。「不登校とは何か」について個々の多様な捉えをすり合わせて全体共有を図った後、学校ごとに分かれ、第 1 版を用いて自校の課題とその対応について検討してもらった。終了後、参加した先生方にシートに関するご意見をいただいた。以下、代表的なものを掲載する。

- これまで漠然と捉えていた課題が整理できた。
- 手引きを参照して、課題や対応について考えることができた。
- 学校で起きた具体例から自校の課題を考えていく方がよい。
- 「継続」「新規」の状況が理解しやすいように工夫されたい。
- 記入しにくい。記入例が欲しい。

《シート改良へ向けての考察》

不登校を「継続」「新規」に分け、その支援について同僚と俯瞰的に考え合えたことは、大きな成果であった。しかし、対応に苦慮している個別の事例を検討することで自校の課題を分析したいという声も複数あった。参加者が予防的・開発的な視点で円滑な協議を進め、前向きな具体策を提案し合うためには、より丁寧な説明や視覚に訴える工夫が必要である。また、参加者の様子をうかがうと、記入にあまり時間を充てず活発な協議を進めることができていたため、記入欄を整理する必要がある。

（２）【事例２】連携協力校からの第１版に関する意見収集

連携協力校において、複数の先生方にシートに関する忌憚のないご意見をいただいた。以下、代表的なものを掲載する。

- 記入欄が多い。アンケートのような印象を受ける。考え合うシートという感じではない。
- 構造化（図示）すると良い。記入欄には罫線がほしい。
- 「学校の課題」といわれても考えづらい。担任としては答えづらい。
- 「学校の課題」よりも「一人一人の生徒（個）への支援」を話題にしたい。
- 複数の教職員が集まるからこそ共有できるシートが理想である。連携の手段を探れるとよい。

《シート改良へ向けての考察》

「継続」「新規」といった統計上の分析から自校の課題を検討するのは、やはり学校現場では馴染みがなく難しい。個別事例に対する支援会議など従来の取組を最大限活かし、「複数の教職員が集まるからこそできる」共有・連携のためのシートに改良する必要がある。

3 「不登校への支援について考える」シート（試案）の開発と提案

ポイント（第１版からの改良点）

- ・記入欄を整理し、資料編（①～③）と作業編（④）に分けた。内容や時間を区切って進行できる。
- ・不登校を「継続」「新規」に分類して考察する趣旨を、冒頭で説明した。表やグラフを入れ、自校の現状が視覚的にわかるようにした（①）。
- ・取組の方向性をフローチャートで確認し、手引きや実践事例集を活用できるようにした（②～③）。
- ・具体的な支援策を共有しやすいように、付せんを使用できるようにした（④）。
- ・既存の資源（現在実践していて有効だと思うもの）を中心に協議できるよう、説明を加えた（④）。
- ・組織の一員として何ができるか、自分の役割を意識しながら検討できるようにした（④）。

（１）【事例３】連携協力校からの「不登校への支援について考える」シート（試案）に関する意見収集

不登校支援を見直す学校体制づくりのために「学校で工夫して活用できる」などというご意見をいただくことができた。以下、代表的なものを掲載する。

- 「新たな不登校を生まない」という視点が強化され、何をどのようにすればよいのかがわかる。
- 「点」（個々の先生のがんばり）を「線」「面」（校内連携による支援）にするために使える。
- 実状に合わせて、学校で工夫して活用できる。まずは関係職員で使ってみたい。

4 シート活用によせて

本研究を通して、教職員一人一人が「不登校への支援」に対する熱い思いをもち、日々粘り強い取組をしていることを肌で感じる事ができた。目前には多様な児童生徒がいてその支援は当然異なるから、個別事例に対する原因追及や問題解決的な支援に終始してしまうのは無理もない。しかし、それだけでは校内の教職員同士の思いや取組がまとまりにくくなることもある。

今回提案したシートを活用することによって、校内の教職員間で新たな気づきが生まれたり、「不登校」を捉える視点や取組のねらいを共有することができた。今や不登校は取り巻く環境によってはどの児童生徒にも起こり得るものであり、「新たな不登校を生まない」という視点に立った教育実践の見直しが必要である。今後は、不登校児童生徒の社会的自立に向けた支援を充実させるとともに、より一層予防的・開発的な生徒指導へ意識を転換していただきたく、各学校でシートを活用するなどして工夫されたい。

「不登校への支援について考える」シート（試案）

長野県総合教育センター

不登校は、取り巻く環境によっては、どの児童生徒にも起こり得ることとして捉える必要があります。学校が組織として不登校への支援を進めていくためには、不登校が長期化している児童生徒への個別的な対応を充実させるとともに、「新たな不登校を生まない」という視点に立った教育実践の見直しが重要になります。

本シートは、自校の不登校児童生徒数を統計的に捉え、学校全体で不登校への支援について共有・連携することを目的としています。不登校児童生徒を「新規」「継続」に分け、「不登校支援の取組(段階)」について検討してみましょう。そして、手引き『不登校への支援について考える(「不登校への対応の手引き」改訂版)』や実践事例集を参考に、組織として取り組めそうな具体策を話し合ってみましょう。

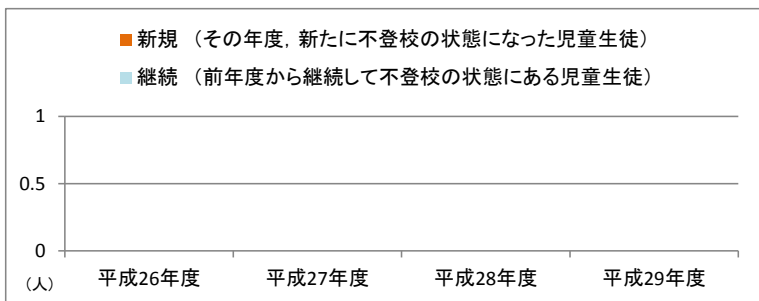
①から順に進めてください。記入欄にはメモを取るなどしてください。《 》内の所要時間はおよその目安です。

1 次の統計は、自校の不登校児童生徒数の推移を示したものです。気が付いたことを話し合ってみましょう。

※不登校児童生徒とは、年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由によるものを除いた者のことです。 《10分間》

	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
計	0	0	0	0
(うち前年度不登校)	0	0	0	0
平成29年度入学生				①
うち前年度不登校				
平成28年度入学生			①	②
うち前年度不登校				
平成27年度入学生		①	②	③
うち前年度不登校				
平成26年度入学生	①	②	③	④
うち前年度不登校				
平成25年度入学生	②	③	④	⑤
うち前年度不登校				
平成24年度入学生	③	④	⑤	⑥
うち前年度不登校				
平成23年度入学生	④	⑤	⑥	
うち前年度不登校				
平成22年度入学生	⑤	⑥		
うち前年度不登校				
平成21年度入学生	⑥			
うち前年度不登校				

※①:1年 ②:2年 ③:3年 ④:4年 ⑤:5年 ⑥:6年



学校全体として

「新規」抑制の取組は

課題あり ●●●● 効果あり

「継続」減少の取組は

課題あり ●●●● 効果あり

現学年別に考えると

1年 (「新規」が多い・「継続」が多い) 4年 (「新規」が多い・「継続」が多い)
2年 (「新規」が多い・「継続」が多い) 5年 (「新規」が多い・「継続」が多い)
3年 (「新規」が多い・「継続」が多い) 6年 (「新規」が多い・「継続」が多い)

2 学校として力を入れたい取組の方向性を話し合ってみましょう。[課題の共有] 《10分間》

自校の課題	とくに注意したい児童生徒	視点	取組(段階)	方向
「新規」抑制に課題がある	すべての児童生徒	「新規」不登校を生まない	未然防止	魅力ある学校づくりや安心安全な生活環境をつくる
	不登校の兆しが見える児童生徒 (欠席がちな児童生徒、過去に不登校を経験した児童生徒)		初期対応	不登校の兆しを早期に発見し、適切な支援を早期に開始する
「継続」減少に課題がある	前年度不登校だった児童生徒	今年度30日以内の欠席なら、「継続」減少となる	社会的な自立支援	自らの進路を主体的に形成していくための生き方を支援する
	前年度から不登校で現在も不登校が継続している児童生徒	長期化を打開したい対応は個別の事例による		

3 手引きや実践事例集(県内の学校や自治体の取組事例)を参考にしてみましょう。 《10分間》

取組(段階)	手引きで参考になりそうな章	実践事例集で参考になりそうなもの
未然防止	第2章 未然防止のための学校づくり	ア. 子どもが「望ましい人間関係づくり」に取り組む機会を設ける ウ. 校内に安心できる居場所をつくる
初期対応	第3章 初期対応	イ. 初期対応を徹底する
社会的な自立支援	第4章 児童生徒理解	ウ. 校内に安心できる居場所をつくる
	第5章 支援のあり方を考える	ア. 子どもが「望ましい人間関係づくり」に取り組む機会を設ける

(注)手引きの第6章や第7章、実践事例集の「エ その他」も参考になります

[参考になりそうな具体]

4 学校全体で実際に取り組めそうなことを話し合ってみましょう。

- (1) ③で考えたことをヒントに、個人で具体策を考えて書き上げてみましょう。 《5分間》
(※枠内に付せんを貼ってから記入すると、あとで共有しやすくなります。)

-------------------------------	-------------------------------

-------------------------------	-------------------------------

- (2) (※ホワイトボードや模造紙に付せんを貼って)全体で共有してみましょう。大切にしたい点や実践可能なものを整理してみましょう。その際、既存の資源(現在実践していて有効だと思うものなど)を中心に話し合いを進めるとよいでしょう。 《10分間》

- (3) 全体で連携して実践していきたいことを決めてみましょう。 《10分間》

- ・スモールステップを考えると、より実践しやすくなるでしょう。
- ・自分の役割を意識してみましょう。

【全体で連携して実践すること】	
【スモールステップ】	【自分の役割】(担任や校務分掌など)
ステップ 1	
ステップ 2	
ステップ 3	

- (4) (3)の点検の時期や方法を話し合っておきましょう。 《5分間》

「不登校への支援について考える」シート（試案）

【記入例】

長野県総合教育センター

不登校は、取り巻く環境によっては、どの児童生徒にも起こり得ることとして捉える必要があります。学校が組織として不登校への支援を進めていくためには、不登校が長期化している児童生徒への個別的な対応を充実させるとともに、「新たな不登校を生まない」という視点に立った教育実践の見直しが重要になります。

本シートは、自校の不登校児童生徒数を統計的に捉え、学校全体で不登校への支援について共有・連携することを目的としています。不登校児童生徒を「新規」「継続」に分け、「不登校支援の取組（段階）」について検討してみましょう。そして、手引き『不登校への支援について考える（「不登校への対応の手引き」改訂版）』や実践事例集を参考に、組織として取り組めそうな具体策を話し合ってみましょう。

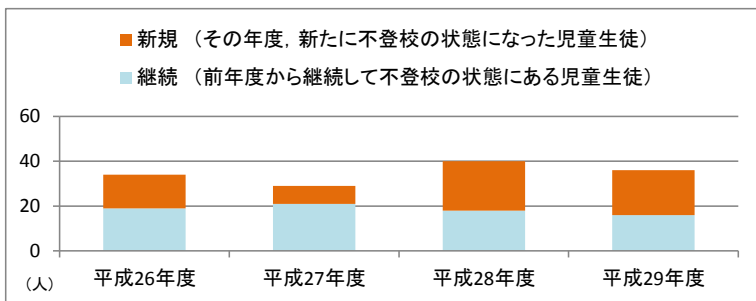
①から順に進めてください。記入欄にはメモを取るなどしてください。《 》内の所要時間はおよその目安です。

1 次の統計は、自校の不登校児童生徒数の推移を示したものです。気が付いたことを話し合ってみましょう。

※不登校児童生徒とは、年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由によるものを除いた者のことです。 《10分間》

	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
計	34	29	40	36
（うち前年度不登校）	19	21	18	16
平成29年度入学生				① 4
うち前年度不登校				
平成28年度入学生			① 6	② 6
うち前年度不登校				1
平成27年度入学生		① 2	② 8	③ 6
うち前年度不登校			2	2
平成26年度入学生	① 6	② 8	③ 8	④ 7
うち前年度不登校		5	3	5
平成25年度入学生	② 8	③ 4	④ 4	⑤ 5
うち前年度不登校	4	4	4	4
平成24年度入学生	③ 8	④ 7	⑤ 7	⑥ 8
うち前年度不登校	7	6	5	4
平成23年度入学生	④ 5	⑤ 6	⑥ 7	
うち前年度不登校	3	4	4	
平成22年度入学生	⑤ 4	⑥ 2		
うち前年度不登校	3	2		
平成21年度入学生	⑥ 3			
うち前年度不登校	2			

※①:1年 ②:2年 ③:3年 ④:4年 ⑤:5年 ⑥:6年



学校全体として

「新規」抑制の取組は

課題あり ● ● ● ● 効果あり

「継続」減少の取組は

課題あり ● ● ● ● 効果あり

現学年別に考えると

1年（「新規」が多い）「継続」が多い 4年（「新規」が多い・「継続」が多い）
2年（「新規」が多い）「継続」が多い 5年（「新規」が多い・「継続」が多い）
3年（「新規」が多い）「継続」が多い 6年（「新規」が多い・「継続」が多い）

2 学校として力を入れたい取組の方向性を話し合ってみましょう。[課題の共有]

自校の課題	とくに注意したい児童生徒	視点
「新規」抑制に課題がある	すべての児童生徒 不登校の兆しが見える児童生徒 (欠席がちな児童生徒、過去に不登校を経験した児童生徒)	「新規」不登校を生まない
「継続」減少に課題がある	前年度不登校だった児童生徒 前年度から不登校で現在も不登校が継続している児童生徒	今年度30日以内の欠席なら、「継続」減少となる 長期化を打開したい対応は個別の事例による

支援会議を積み重ねることで「継続」減少につながっているが、高学年になると「継続」解消は困難になる。低学年では「新規」が多いから、やはり未然防止や初期対応が大事なのか？！

取組（段階）	
未然防止	
初期対応	
社会的な自立支援	自らの進路を主体的に形成していくための生き方を支援する

3 手引きや実践事例集（県内の学校や自治体の取組事例）を参考にしてみましょう。 《10分間》

取組（段階）	手引きで参考になりそうな章	実践事例集で参考になりそうなもの
未然防止	第2章 未然防止のための学校づくり	ア 子どもが「望ましい人間関係づくり」に取り組む機会を設ける ウ 校内に安心できる居場所をつくる
初期対応	第3章 初期対応	イ 初期対応を徹底する
社会的な自立支援	第4章 児童生徒理解 第5章 支援のあり方を考える	ウ 校内に安心できる居場所をつくる ア 子どもが「望ましい人間関係づくり」に取り組む機会を設ける

（注）手引きの第6章や第7章、実践事例集の「エ その他」も参考になります

[参考になりそうな具体]

- ・手引きp.7から、初期段階（欠席3日目まで）の関わりが重要であることを確認した。
- ・実践事例集のp.1から、子ども同士が認め合える人間関係づくりが有効であることを確認した。

4 学校全体で実際に取り組めそうなことを話し合ってみましょう。

- (1) ③で考えたことをヒントに、個人で具体策を考えて書き上げてみましょう。 《5分間》
(※枠内に付せんを貼ってから記入すると、あとで共有しやすくなります。)

職員室の黒板を活用して、欠席や遅刻・早退の状況や小さな変化について情報を共有する。

子どもへは積極的に声がけをする。いつもと何か違うと感じた子どもには「どうした？」とさりげなく声をかける。

学習や行動のつまづきに気を配り、授業のユニバーサルデザイン化の視点から、授業や教室環境の改善を図る。

居心地のよい学級づくりに心掛ける。子ども同士が認め合ったり、配慮し合ったりすることができる学級活動を定期的に行う。

- (2) (※ホワイトボードや模造紙に付せんを貼って) 全体で共有してみましょう。大切にしたい点や実践可能なものを整理してみましょう。その際、既存の資源（現在実践していて有効だと思うものなど）を中心に話し合いを進めるとよいでしょう。 《10分間》

- (3) 全体で連携して実践していきたいことを決めてみましょう。
・スモールステップを考えると、より実践しやすくなるでしょう。
・自分の役割を意識してみましょう。

「継続」への支援はこれまでどおり大事にしたい。

課題は「新規」を生まないことだから、未然防止や初期対応を意識したい。

【全体で連携して実践すること】

①すべての子どもが安心して学校生活が送れるような「居場所」をつくり、

「学習環境（授業）」を改善する。

②子どもの変化について全職員で情報を定期的に共有する。

【スモールステップ】 ①について

ステップ1 子どもの困り感を理解する。

【自分の役割】（担任や校務分掌など 学級担任として）

定期的に面接（相談）を行う。

ステップ2 その子にあった居場所をつくる。

相談室や保健室を活用し、連携する。

ステップ3 子どもが認め合える授業をつくる。

主体的・対話的で深い学びを推進する。

- (4) (3)の点検の時期や方法を話し合っておきましょう。 《5分間》

・面接や相談の記録を報告する機会を、職員会で定期的にもつ（2カ月に1回）。

・学校生活に係るアンケートを実施し、全職員で情報共有する機会をもつ（年2回）。

・子どもがお互いを認め合う授業を実践し、学年単位で見合う（学期に1回）。